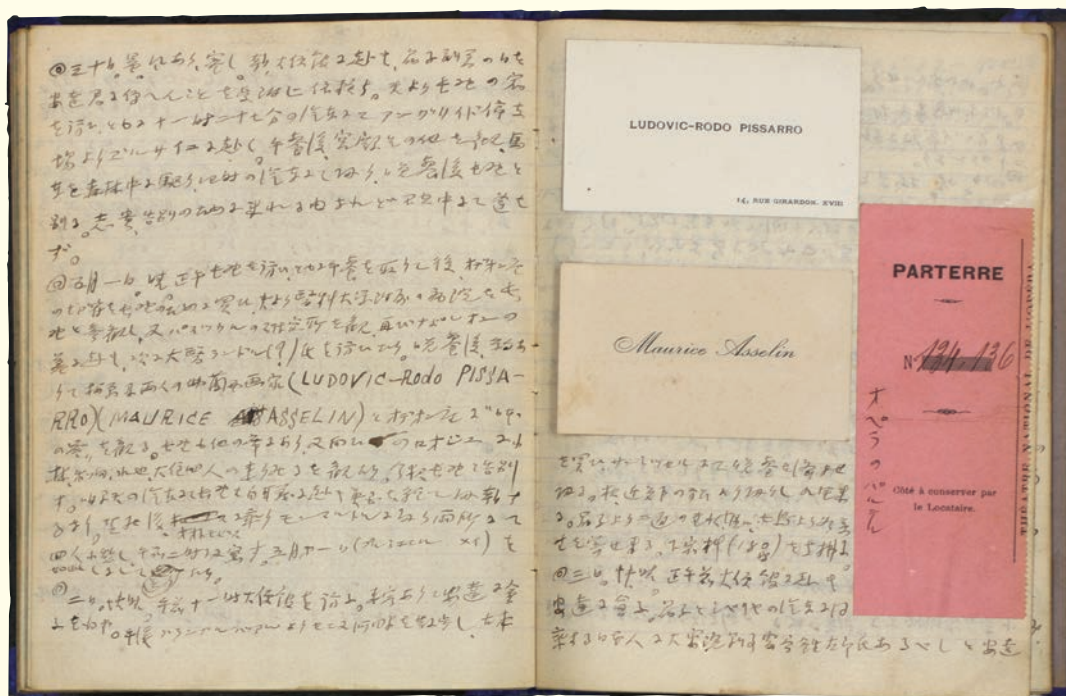


さかい利晶の杜

学芸だより 第12号

企画展イチオシ資料紹介！



与謝野寛筆「渡欧日記」(与謝野光氏旧蔵)

与謝野寛は、明治四四年(一九一〇)から約一年間、フランスのパリを拠点に、イギリス、ドイツ、オーストリア、オランダ、イタリアを訪れました。本資料は、その旅行時に寛が記した日記です。横野のあるシンプルなノートに黒インクで記され、ところどころに朱書きの訂正箇所が見られます。また、観劇のチケットや名刺、新聞記事なども貼り付けられるなど、寛の几帳面さが感じられます。

日記を開くと、人名と住所がフランス語や日本語で記され、中には名刺が貼られるなど、必要な連絡先が列記されているページがあり、日記本文は五ページ目から始まります。明治四四年(一九一〇)十一月十九日から翌大正元年(一九一〇)二月十七日にかけてほぼ欠かすことなく、一二ページにわたって綴られています。

寛は、旅行中の出来事を東京朝日新聞に寄稿する約束をしており、そのための記録として書かれた日記ではないかと思われます。また、帰国後の翌年に出版された寛と晶子の紀行文集『巴里より』をはじめ、晶子詩歌集『夏より秋へ』と歌集『太陽と薔薇』、寛訳詩集『リラの花』といった渡欧時に創作された作品の背景を知る貴重な基礎資料であることは間違いありません。

本資料は、令和七年夏に開催した企画展「パリより」にて初公開され、その存在が明らかになりました。

(与謝野晶子記念館学芸員 森下明穂)

展示報告

企画展「堺に生きた山崎豊子のまなざし―愛用品の数々―」

会期：令和七年四月一九日(土)～五月二九日(木)

『大地の子』、『華麗なる一族』、『沈まぬ太陽』など多くの人に愛される作品を書いた山崎豊子が堺に住んでいたことを知っている人は、あまりいないのではないのでしょうか。

山崎豊子は大阪・船場の昆布商の娘として生まれましたが、浜寺公園にある水練所に通うなど、幼少期から堺近辺に親しんでいたようです。堺に住み始めた時期ははっきりとはわかりませんが、結婚後の昭和三七年(一九六二)ごろに堺の浜寺に居を構えたようです。

本展では、山崎豊子が暮らした家に保管されている遺品を中心にその業績を追う形を取りました。

第一章 山崎豊子の癒しの地・堺

山崎豊子の年譜を中心に、作家となる前の女学校時代の写真、作文、新聞記者時代の先輩でもある作家井上靖からの手紙、色紙等を展示しました。

特に、相愛大学から借用した相愛女学校時代の作文は、豊子の文学的素養が垣間見え、戦前・戦中の女学生たちの雰囲気伝えるという点でも非常に重要な資料といえます。さらに、本資料を発見した荒井真理亜氏(相愛大学教授)が「山崎豊子の文学的出発―新資料から見えてくること―」という題で講演され、盛況を博しました。

第二章 山崎豊子、執筆の現場

①書齋再現

作家となった山崎豊子の書齋を中心にご紹介しました。書



齋の机とこだわりの椅子を展示室の中心に配置し、本棚をほぼ原寸大で再現したパネルを壁面に置きました。本棚に並んだ書影からは、創作の工夫がにじみ出るようで、足を止めてじっくりご覧になる方も多くいらっしゃいました。

執筆の際に使用された万年筆やペンからは創作の息づかいが感じられました。封を切られないまま残されたマーカーからは、最後まで作品に向き合った作家・山崎豊子の姿が浮かびます。

②創造の翼

山崎豊子は「取材の鬼」といわれるほど、取材にこだわった作家でした。取材に使用した歴代のカセットテープレコーダーや取材先で購入したお土産を展示し、作品がどのように生まれたかを追いました。

第三章 山崎豊子のおもてなし

最後となる第三章では、出版社などさまざまなひとをおもてなした応接室の遺品から、山崎豊子の趣味が感じられる展示となりました。夫である杉本亀久雄の絵画や華やかな絵付けのティーカップなどから、重厚な作品とは異なる、温かな人柄がうかがえました。

本企画展には、膨大な資料を快く拝見する機会をいただき、また借用させていただいた山崎豊子著作権管理法人、ならびに相愛大学に大変多くのご協力をいただきました。この場で改めて御礼を申し上げます。

(与謝野晶子記念館学芸員 木下響子)

展示報告

企画展「パリよりー与謝野晶子と寛の渡欧体験ー」

会期：令和七年七月二六日～九月七日



チラシ

令和七年（二〇二五）は、さかい利晶の杜開館十周年として、さまざまな展示を行いました。その中でも最も力を入れた展示会が、企画展「パリよりー与謝野晶子と寛の渡欧体験ー」でした。本展では、晶子と寛の人生を大きく変えた一九一二年の渡欧体験を、共著である紀行文集『パリより』や寛の「渡欧日記」を中心に、思い出の品々を通して紹介しました。特に、寛の渡欧日記やフランスの雑誌掲載用に撮影された晶子と寛の肖像写真、パリで面会した彫刻家のオーギュスト・ロダンが寛に送った書簡などの初公開資料は大変注目を集め、好評でした。

第一章

「憧れのパリへ

ー『パリより』と寛の「渡欧日記」でたどるー

晶子と寛が滞在していたパリの様子を、地図や実物資料を展示し、二人の紀行文や詩歌とあわせ紹介しました。

初公開となる二人の創作ノートをはじめ、寛の名刺入れに入っていた遊園地の半券や地下鉄の切符、晶子に持たせたであろうシベリア鉄道の停車駅と日付が書かれたメモなどを展示しました。また、晶子がパリで描いた油絵と愛用の絵具箱を展示したところ、来館者の方から「歌人とは違う一面を知ることができてよかった」という感想をいただきました。

第二章

「さまざまな交流をとおして

ー知られざる寛とロダンのかわりー



会場風景

寛の幅広い交流による貴重な体験を紹介しました。二人の渡欧体験のうち、最も印象に残っているのが彫刻家オーギュスト・ロダンとの出会いでした。寛は、面会時に

ロダンから日本でのロダン展開催について相談されます。本展では、ロダンが帰国後の寛に宛てた書簡を展示しました。また、晶子が、有名な日本の女性詩人として紹介されたフランスの雑誌と、掲載用に撮影された肖像写真のオリジナルを初公開しました。

第三章

「渡欧体験がもたらしたもの

ー晶子のことばを中心にー

帰国後の晶子の活動や人生に渡欧体験がどのように影響し、かわっていたかを紹介しました。晶子は、渡欧体験をした「新しい女」として日本社会に求められ、総合雑誌『太陽』などに社会評論文の連載を始めます。特に、「性」という人間の根源的な問題に目を向け、女性の権利の向上や自立を求める評論活動を行いました。さらにその活動は個性を尊重する文化学院での人間教育へと発展していきました。これらの活動を支えるグローバルな視点が渡欧体験によって培われたことを、晶子の言葉を中心に紹介しました。

本展は、開館当初から実施してきた資料調査の成果を反映したものです。会期中には、与謝野家のご遺族をはじめ、遠方からも多くの方が本展に来館されました。なかでも、日仏文化学院パリ日本人学校の元教員の方や保護者の方がご来館くださり、校庭に設置された晶子の歌碑についての情報を寄せていただくなど、あらたな交流も生まれました。

■当時の写真をカラー化

晶子と寛がパリの下宿先の庭で撮影された写真のカラー化を行い、二つの写真を並べたパネルを展示しました。植物の鮮やかな色が再現され当時の様子をリアルに感じただけの機会となりました。



個人蔵



カラー化技術：株式会社朋成

■記念対談「与謝野晶子と寛が歩いたパリ」

日時：七月二十七日(日)午後二時～三時三〇分
 講師：神野藤昭夫氏(跡見学園女子大学名誉教授)、
 菊地英之氏(日仏文化交流研究者)

晶子と寛が渡欧した頃と現在のパリの様子を、多数の画像を紹介しながらお話いただきました。晶子も聴いたメルルという鳥の鳴き声が入った動画も紹介されました。参加者の方からは「当時のパリの様子がよく分かってよかった」「晶子と寛と一緒に旅をしている気分になった」などの意見をいただき大変好評でした。

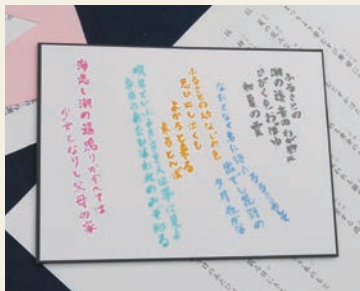


対談の風景

■ワークショップ「ミニ百首屏風をつくってみよう」

日時：八月二十七日(日)一〇時三〇分／午後二時
 講師：根来孝明(当館学芸員)

小さな二つ折りの色紙に晶子の短歌を選んで書いてもらうワークショップを行いました。こどもと一緒に参加されたご家族も多く、大人も楽しみながら真剣に書いたり、晶子の短歌の意味や背景を考えながら短歌を選んだり書いたりする方もいました。このワークショップを通じて晶子の短歌に興味を持ってもらう機会になりました。



ワークショップの作品と風景

(与謝野晶子記念館学芸員 森下明穂)

コーナー展示紹介

千利休茶の湯館

茶掛の書

令和七年三月一九日(水)～六月一六日(月)

複製で見る利休と茶の湯にまつわる書

令和七年六月一八日(水)～十月二〇日(月)

堺大浜にあった料亭 一力楼 伝来の書

令和七年一〇月二二日(水)～

一二月一五日(月)

現代に伝わる千家十職

—さかい利晶の杜の收藏品より—

令和七年二月一七日(水)～

令和八年三月一六日(月)



堺大浜にあった料亭 一力楼 伝来の書



展示風景(左)とポスター画像(右)

千利休茶の湯館では、令和七年度に四つのコーナー展示を実施しました。

「茶掛の書」では、茶室の床に掛ける軸に仕立てられた作品を展示しました。千利休(一五二二～一五九二)の書状に始まり、武田信玄(一五二一～一五七三)や豊臣秀吉(一五三七～一五九八)の朱印状などを紹介しました。それに続く「複製で見る利休と茶の湯にまつわる書画」では、千利休像や玉圃(生没年不詳)の絵画などの複製を通して、茶の湯で愛好された書画作品を紹介しました。

一〇月から開催した「堺大浜にあった料亭 一力楼 伝来の書」は、九月二〇日(土)～二月一四日(日)に開催した企画展「線路は続くよ堺までーオモチャと実物でたどる「世界・日本・堺」の鉄道の歴史」に関連する内容として展示しました。堺に鉄道が開通したのは、明治二年(一八八八)五月のことです。阪堺鉄道(現在の南海電鉄)が難波から堺までの区間を開業したことが、その始まりです。開業した駅は、現在の南海電鉄堺駅に相当しますが、当時の駅名は「吾妻橋」でした。

堺駅の西側にある大浜海岸は、鉄道を利用して遊びに行く目的の地の一つとして大きく賑わいました。当時多くの料理旅館が並んでいましたが、その中で一番古い創業であったといわれているのが「一力楼」です。本コーナー展示は、千利休茶の湯館の最後に置かれた展示ケースで実施しました。常設展示をご覧いただき、堺茶の湯・千利休について紹介した後、「一力楼」に伝来した書をご覧いただくことで、かつての大浜海岸に行き来した人々の姿に想いを馳せていただくことが、本展示の目的でした。企画展と連携するような内容を展示し、さかい利晶の杜という施設全体を楽しんでいただきたいという思いがありました。

一二月からは、当館が収蔵する「千家十職」の資料を展示しました。「千家十職」とは表千家/裏千家/武者小路千家の茶道三千家家元の茶道具を作る職人集団のことです。これらの家はそれぞれ、古くは千利休の時代から、伝統の技を引き継いできました。本コーナー展示では、現代に伝わる千家十職の妙技を、実物資料を通してご覧いただきました。今後も、堺/茶の湯/千利休に関する内容ははじめとして、時に企画展の内容とも連携しながら、さまざまな展示を実施していきたいと思っております。小規模ではありますが、ご来館の際にはぜひじっくりと鑑賞ください。

(千利休茶の湯館学芸員 根来孝明)

与謝野晶子記念館

晶子の自筆歌掛軸(山の雨)

令和七年三月一九日(水)～五月一九日(月)

晶子の歌が織り込まれた大島紬

令和七年五月二二日(水)～七月一四日(月)

企画展「パリより」関連展示「森鷗外の支援」

令和七年七月一六日(水)～九月一五日(月・祝)

与謝野夫妻とレストランの主人

令和七年九月一七日(水)～十一月一七日(月)

与謝野晶子と画家・中川紀元

令和七年十一月一九日(水)～二月一五日(月)

与謝野晶子と高島屋

令和七年二月一七日(水)～

令和八年二月一六日(月)

『明星』の題字デザイン

—与謝野夫妻と中村不折の交流

令和八年二月一八日(水)～五月一八日(月)



展示風景:与謝野晶子とレストランの主人



展示風景:与謝野晶子と高島屋



展示風景:『明星』の題字デザイン
—与謝野夫妻と中村不折の交流

与謝野晶子記念館では、常設展示室内で、所蔵資料を多面的に紹介するコーナー展示を実施しています。特に令和七年度はさかい利晶の杜の開館十周年を記念し、初公開資料を中心に、七つのテーマによる展示を行いました。ここでは秋冬に開催した三つの展示について概説します。

「与謝野夫妻とレストランの主人」では、大正期に文化サロンの役割を果たした東京の西洋料理店「メイソン 鴻乃巣」の主人・奥田駒蔵(一八八二～一九二五)と与謝野夫妻の心あたたまる交流に光を当てました。夫妻とともに旅をし、独学で絵に打ち込んだ駒蔵の筆による掛軸や書簡、夫妻のために蛙の図を刻した印章を初公開しました。「与謝野晶子と高島屋」は、高島屋堺店の営業終了の折にあわせて企画した展示です。晶子が高島屋の呉服審査発表会「百選会」の顧問を務めたことに着目し、掛軸や書籍等の関連資料を出品しました。晶子が命名した流行色や、着物にまつわる色とりどりの歌をお楽しみいただきました。

『明星』の題字デザイン—与謝野夫妻と中村不折の交流—では、画家・書家の中村不折(一八六六～一九四三)筆の書簡三通を初公開しました。大正期に復刊した雑誌『明星』のために、不折は中国の書からあらゆる書体の「明」と「星」を集めて提案し、寛・晶子はこれらを月替わりの扉字として採用しました。書簡と誌面の展示を通して、不折の文字へのこだわり、寛・晶子の雑誌編集の裏側に光を当てる機会となりました。

与謝野晶子記念館では、与謝野夫妻の知られざる活躍を今に伝える貴重な資料を今後も展示してまいります。

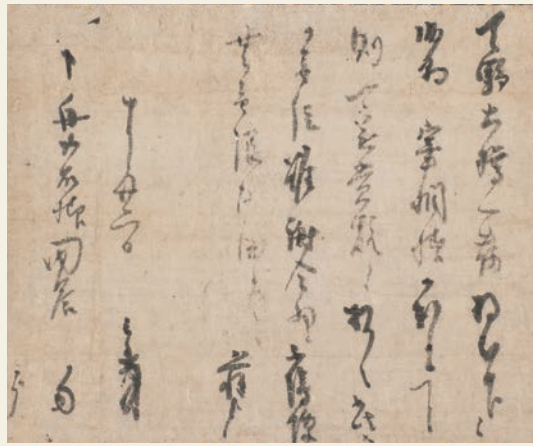
(与謝野晶子記念館学芸員 高原茉莉奈)

資料紹介

千利休（二五二〜一五九二）

《舟越五郎右衛門宛書状》

安土桃山時代 天正一四年（一五八六）
堺市博物館蔵（宇野茶道美術館旧蔵）



本作は、千利休から舟越景直（一五四〇〜一六一一）に送られた手紙です。景直は三好長慶（一五二三〜一五六四）の弟・安宅冬康（一五二八〜一五六四）に仕えた人物で、五郎右衛門と称しました。その書には自然な墨の潤濁が見られ、飾らない書きぶりが魅力的です。手紙の本文は、次のように書かれています。

あまののおわたるいつか、もたせられさうらう。
天野大樽一荷、持被下候。

明朝、宰相様御出にて候。

則、可遂賞翫候。折々、如此

御音信、難謝令存候。不得隙、

無音限沙汰存候。恐惶かしく。

十月廿二日 宗易「花押」

舟五右様回答 易より

「大意」

天野酒一樽をいただきました。明日の朝、宰相様がいらつしやいます。その時に賞味いたします。いつもいつも、このようなお便りをいただき、お礼のしようもございません。忙しく、なかなか連絡が出来ません。恐れながら申し上げます。

河内産の銘酒として名高い「天野酒」を贈ってもらったお礼が記されています。また、それを翌朝「宰相様（豊臣秀吉の弟・秀長のことか）」が来られた時に賞味するつもりであることが記されています。文章の内容から、千利休と豊臣家の関係がうかがえます。

本作は現在、茶室の床の間にかける形式の掛軸（茶掛け）になっています。利休が筆を運ぶ姿を想起させる本作は、茶会を演出する貴重な道具のひとつとして愛好されてきたのでしょうか。

（千利休茶の湯館学芸員 根来孝明）

駿河屋の万博メダル

与謝野晶子の実家は、駿河屋という和菓子店でした。和歌山に総本家があり、大阪の駿河屋が分家、大阪の駿河屋からさらに晶子の祖父が別家として独立しました。晶子の父の代に、大阪から堺へ引越しました。晶子の父は西洋的な趣味を持つており、堺の駿河屋は二階部分に西洋風の破風窓や、ステンドグラスがはめ込まれ、屋根の大きな時計が道行く人々の目印になっていました。また、店先では和菓子のほかに洋酒なども置いていたようです。実は、この駿河屋は二度も万博に出品し、メダルを授与されており、そのメダルが当館に所蔵されています。

さて、日本が万博に初めて参加したのは慶応三年（一八六七）の第二回パリ万博です。その後、内国勸業博覧会などを通じ、日本政府は自国からどんなものを出品するかを選定しました。晶子は幼いころ姉や兄が奈良の博覧会に連れて行つてもらったにもかかわらず、自分は行けなかったことが残念だったと後に述べていますが、父親が兄弟たちを連れて博覧会に行つたのはただの見物ではなく、駿河屋が万博に出品する、その前段階の視察も兼ねていたのかもしれない。

当館に所蔵されている万博のメダルは

明治二十一年（一八八八）のバルセロナ万博と明治二十二年（一八八九）の第四回パリ万博です。現在、フランスでは羊羹が受け入れられているようですが、以前は甘い豆菓子である羊羹は、なかなか西欧ではなじみがなかったようです。しかし、そのような時代でもメダルを受賞できるほど、駿河屋の羊羹は美味しかったのでしよう。当時のラベルには受賞したメダルが掲載されています。当館にお越しになった際は、駿河屋の再現展示と併せて、当時の万博にも思いをはせていただければと思います。

（与謝野晶子記念館学芸員 木下響子）





駿河屋のラベル



バルセロナ万博のメダル


令和7年度の企画展

令和7年

4月	5月	6月	7月
<p>4月19日(土)～ 5月29日(木)</p>  <p>堺に生きた山崎豊子のまなざし 愛用品の数々</p>		<p>6月7日(土)～ 7月21日(月・祝)</p>  <p>シルバニアファミリーのせかい展</p>	

8月	9月	10月	11月
<p>7月26日(土)～ 9月7日(日)</p>  <p>パリより - 与謝野晶子と寛の渡欧体験 -</p>	<p>9月20日(土)～ 12月14日(日)</p>  <p>線路はつづくよ堺まで</p>		

令和8年

12月	1月	2月	3月
	<p>1月24日(土)～ 3月15日(日)</p>  <p>世界から堺へ ～ 中世界の栄華をたどる～</p>		

各展示の概要はHPでご覧いただけます。

編集後記 さかい利晶の杜学芸だより第12号をお届けします。本号には、令和7年度に当館学芸員が携った企画展や資料調査にかかる報告を掲載しています。同じ文化財でも、学芸員が変われば目の付け所、語り方、魅力の見え方が異なります。その違いが反映されるのが企画展です。当館では、今後も様々なバリエーションの企画展が開催されます。ぜひご来館の上、それぞれの展示をお楽しみいただければ幸いです。
本号編集担当：根来孝明(千利休茶の湯館学芸員)

SAKAI RISHI NO MORI さかい利晶の杜

Sakai Plaza of Rikyu and Akiko

- 千利休茶の湯館
- 茶の湯体験施設
- 与謝野晶子記念館
- 観光案内展示室

〒590-0958 大阪府堺市堺区宿院町西2丁1-1
TEL.072-260-4386 FAX.072-260-4725
https://www.sakai-rishinomori.com



- 開館時間**
 - 千利休茶の湯館・与謝野晶子記念館・観光案内展示室・企画展示室
9:00～18:00
 - ※千利休茶の湯館・与謝野晶子記念館 入館は17:30まで
 - ※企画展示室 企画展開催中のみ開室
- 茶の湯体験施設**
10:00～17:00
- 休館日**
 - 千利休茶の湯館・与謝野晶子記念館・茶の湯体験施設・企画展示室
第3火曜日(祝日の場合は翌日)及び年末年始
 - 観光案内展示室
年末年始

